現代大学生における「教養」の計量的分析

筒井清忠・吉田純・水垣源太郎・佐藤哲彦

1　「教養」概念の歴史社会学的背景

本稿は、現代の高等教育の代表的受け手としての大学生における「教養」のありかたを、学生生活調査にもとづく計量的分析によって、社会学的に明らかにしようとするものである。

高等教育における「教養」というこの問題への関心は、歴史社会学的には高等教育と教養とが重要な結びつきをもっていたことに由来する（筒井[1995]、とくに第2章）。近代的国家整備が進む明治後期には、「立身出世」のルートが中・高等教育機関を経由するようになり、それにともなって青少年の間で「受験地獄」の原型ともいうべき一種のアノミー状況が生じていた。そうした危機に対応する形で、出世よりも個人の人格の完成に重きをおく思潮が成立したのである。とくに旧制高校の場合、「文化の享受を通しての人格の完成」をめざすという意味での「教養主義」が学生文化として成立し、その役割を果たしたのであった。

この旧制高校とは、大学というより高度な「専門」教育機関への登竜門であると同時に、少数の者にのみ許された立身出世コースの輝ける第一歩でもあった。「教養主義」もこうした場の規定を受けて、次のような性格を具えることになる。すなわち「教養」は、(1)大衆文化とは隔絶したエリート文化の中核として、つまり階層的差異の象徴として機能したこと、(2)専門的教育を受けるべき者が当然そなえていなくてはならない前提とされたこと、の二点である。

しかし、戦後も昭和40年代後半になると高度経済成長の影響を受けて、高等教育就学者が大幅に増加し、それにともなって高等教育は大衆化していく。その結果、「教養」の二つの性格も次のように変容してゆく。すなわち、(1)教養主義的文化の差異化機能は失われて、大衆文化との相互浸透が進行する（筒井[1995]、第3章）。(2)また高等教育の内容的側面においても、専門教育重視と実学志向の高まりによって「教養」の地位が相対的に低下していく。この帰結は、教育課程の制度的レベルにおける「教養部」および「一般教養課程」の解体に見られるとおりである。

2 問題設定

現代の「教養」がおかれた先述の二局面のうち、大衆文化との関係という側面は、ブルデューらの文化的再生産論との関係でも興味深いテーマであるが[1]、これ自体いずれ稿を改めて論じるべき独立した問題であると考えられる。そこで本稿ではもうひとつの側面、すなわち高等教育（大学教育）における「教養」の位置づけという問題にテーマを絞りたい。

ただし本稿の目的は、この「教養」の位置づけが、高等教育の送り手の視点からではなく、受け手である大学生の視点からどのようになされているのかを明らかにすることである。それゆえ、本稿で考察するのは、狭義の大学教育における「教養」（すなわち「一般教養」科目）だけではなく、読書やサークル活動、友人との交際なども含めた広義の学生生活全体のなかで、大学生が自らにとっての「教養」をどのように位置づけ、意味づけているかという問題である。

3 データ

上記の課題のために、本稿で分析の対象とするのは、1995年に「学生生活研究会」（代表：筒井清忠、竹内洋）によっておこなわれた大学生に対するアンケート調査のデータである。これは授業時間中に調査票を配布し、回収するという方法によった。対象としたのは、関西圏および首都圏の４大学（国立Ａ大学およびＣ大学、私立Ｂ大学およびＤ大学）の学生であり、文系学部の１、２、３回生が中心である。それゆえ、あくまで限られた調査対象についての分析であり、この分析の結果がただちに日本のすべての大学生に適用できると考えることは厳密には適切ではない。しかしながら、「教養」をめぐる先述の状況が現代日本社会、とりわけ高等教育の場に遍在するものであるとすれば、これら４つの大学においてその状況と規定要因とを問うことは、一定の普遍性をもつといえよう。

なお、有効回答数は700、うちＡ大学が195、Ｂ大学が165、Ｃ大学が145、Ｄ大学が195であった。

---

(1) 文化的再生産論の視点から、日本の大学生の文化受容を対象とした経験的研究もすでにいくつかおこなわれている（）。

4 分析

高等教育における「教養」は、分析的には(a)専門に対する基礎、(b)（専門以外の）幅広い知識、(c)文化の習得による人格の完成という意味での教養（人文的教養）の３つの側面にわけてとらえることができる。かつて旧制高校において典型的にみられたような「教養主義」における「教養」概念の出発点は(c)にあったが、戦後の新制大学教育における一般教育課程は、「教養」概念に(a)(b)の意味を加えるのに重要な役割を果たした（筒井[1995:173ff]）。しかしながらこのプロセスは、冒頭に述べたように、高等教育内部においては、専門教育に対する「教養」教育全体、ないしは「教養」概念そのものの地位低下に帰結したのである。

しかし、この「教養」の三側面は、高等教育の受け手である大学生にとっては、どのように意識され、とらえられているのだろうか。この問いを導きの糸とし、２節で設定した問題に答えるために、下記の三つの設問を中心的な変数として用いた。

(1) 学生生活に関する設問：「あなたの学生生活についてお聞きします。次の授業や活動に、あなたはどの程度まで熱心に取り組んでいますか」(9項目)

(2) 大学イメージに関する設問：「現在あなたが 在籍中の大学は、あなたにとって次のような場所だと思いますか」(4項目)

(3) 読書に関する設問：「あなたは以下のジャンルの本をどの程度、読みますか」(10項目)

これら三つの設問は、先述の「教養」の三側面にそれぞれきちんと対応しているわけでは必ずしもない。しかしながら、以下にみるように、これらの設問への回答を分析していくにあたって、この三側面はいわば補助線としての重要な役割を割り当てられることになる。

(1) 学生生活の志向パターン

学生生活に関する設問で、「次の授業や活動に、あなたはどの程度まで熱心に取り組んでいますか」として尋ねた項目は、(a)「語学の授業」、(b)「一般教養科目の授業（語学を除く）」、(c)「専門科目の講義・演習」、(d)「読書（勉強に直接関係ないものも含む）」、(e)「サークル活動（スポーツ関係）」、(f)「サークル活動（文化関係・学術関係など）」、(g)「友人との交際」、(h)「アルバイト」、(i)「自治会活動」の９項目である。また回答は、「熱心である」「どちらかといえば熱心である」「どちらかといえば熱心で

ない」「熱心でない（または活動経験なし）」の４点尺度による。

ここでの分析の目的は、まず学生生活全般に対する大学生の志向パターンを明らかにすることによって、以後、そのなかでの「教養」の位置づけ・意味づけ・評価を分析するためのパースペクティブを得ることである。そこでまず、これらの全変数（すなわちこの設問の全項目）に対して因子分析をおこなった（厳密には主成分分析であり、軸はバリマックス転回をおこなった）。結果は以下の通りである。

まず、下表のような３つの因子が取り出された。

因子	固有値	寄与率	寄与率（累積）
1	1.94173	21.6%	21.6%
2	1.51315	16.8%	38.4%
3	1.16826	13.0%	51.4%

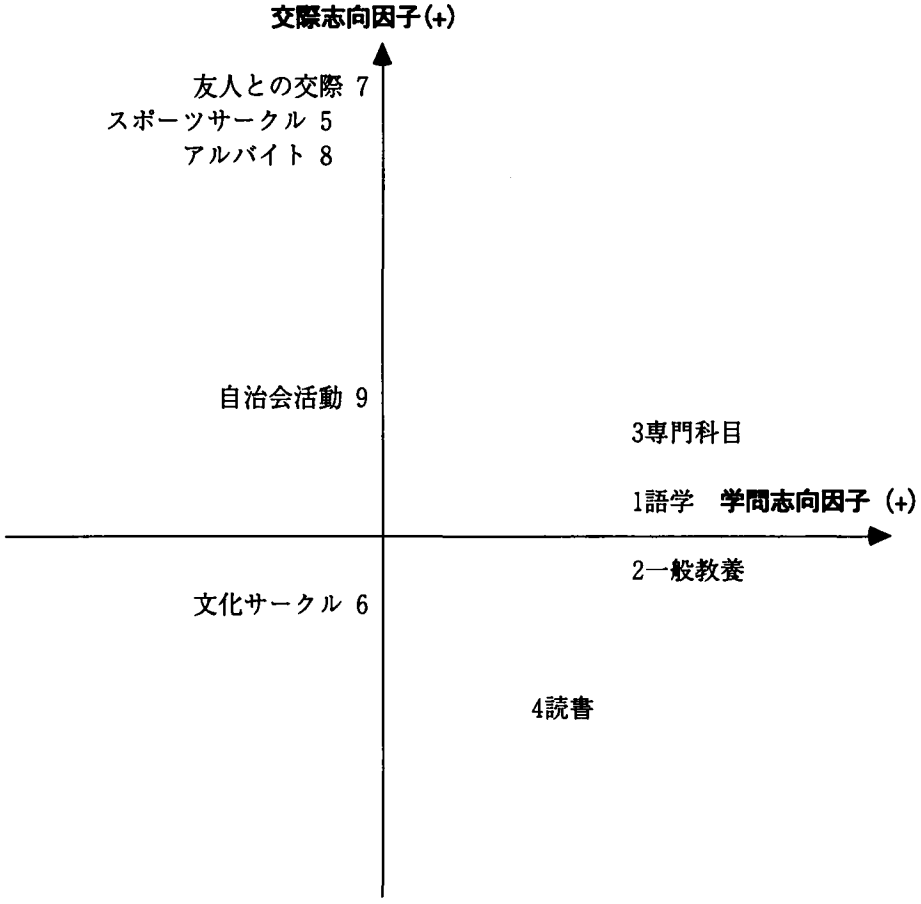
因子1,2,3と各変数との相関係数は下表のようになっている（各因子との相関係数が大きい順にそれぞれソート）。

	因子1	因子2	因子3
専門科目	.74767	.17146	.03674
語学	.73161	.03872	-.05959
一般教養科目	.70312	-.04140	.05873
読書	.51160	-.25818	.21884
友人との交際	.09277	.75821	.13300
サークル(スポーツ)	-.01105	.65921	-.32572
アルバイト	-.06161	.59941	.17031
サークル(文化)	.05806	-.08821	.79899
自治会活動	.05511	.19128	.62774

強い相関をもつ変数の内容から、因子１を「学問志向因子」、因子２を「交際志向因子」、因子３を「文化サークル志向因子」と名づけることができよう。因子３を別にすれば、この設問の回答からは、学生生活全般における一般的な志向パターンとして、大学を学問の場とみるタイプの学生と、友人との交際の場とみるタイプの学生とが大きく二分されるといえる。とくに「読書」変数については、「交際志向因子」とは緩い負の相関を、「文化サークル志向因子」とは緩い正の相関を示していることが注目される。（なお「文化サークル志向因子」については、「自治会活動」と強い正の相関を、「サークル（スポー

ツ）」と負の相関を示していることからも、このタイプのやや少数派的な学生像が見えてきそうである。）

これらの変数間の相関関係を視覚的に示すため、学問志向因子と交際志向因子を横軸と縦軸にとり、各変数をプロットすると次図のようになる。



このプロット図で1,2,3がごく近い位置にあることから、語学やその他の「一般教養」科目に熱心に取り組む学生は、専門科目にも熱心に取り組む傾向がある（その逆も同様である）ことがわかる。また、そうした「学問志向」的な学生は、読書にも比較的熱心であることも示されている。

一方、「交際志向」的な学生は、大学の授業に対する熱心さはどちらともいえず、読書には消極的であることがうかがえる。

以上をまとめると、ここまでの分析で主として明らかになったのは以下の２点であるといえよう。(i)学生生活全般の志向パターンの中では、大学教育が直接に提供する「教養」としての「一般教養」科目への志向は、より広い「学問志向」の一環として位置づけられる。(ii)読書への志向は、「学問志向」とは正の相関関係にあり、「交際志向」とは負の相関関係にある。

(i)の結果は、本節の冒頭で示した「教養」の三側面でいえば、大学生が「専門に対する基礎」としての側面を最も強く「一般教養」科目に見出していることを予想させる。この予想については、設問(2)の分析でさらに検討を加えたい。

(ii)の結果は、「読書」という行為のもつ日常的・一般的なイメージと整合的であることはいえるが、「教養」との関係でこれをどう解釈すべきかは、この段階ではなんともいえない。読書パターンについてはその内容（ジャンル）によってさらに分化していることが予想されるので、この点についての設問(3)の分析において、「教養」と「読書」との関係を改めて検討することとしたい。

(2) 大学イメージにおける「教養」

「現在あなたが在籍中の大学は、あなたにとって次のような場所だと思いますか」という設問で尋ねた項目は、(a)「将来の仕事のために、専門的な知識を獲得する場所」、(b)「人間形成のための幅広い教養を獲得する場所」、(c)「就職に有利な学歴を獲得する場所」、(d)「友人との交際やサークル活動など自由な時間を過ごす場所」の４項目である。回答は、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の４点尺度による。

ここではまず、各変数間の相関関係をみるため、ケンドールの順位相関係数をとる。結果は下表のとおりである（括弧内は有意確率）。

	幅広い教養	就職に有利な学歴	友人との交際など
専門的知識	0.2642 (0.000)	0.1235 (0.000)	0.1064 (0.001)
幅広い教養		0.1108 (0.001)	0.3013 (0.000)
就職に有利な学歴			0.2390 (0.000)

各変数間すべてに正の相関（1%水準で有意）があり、とりわけ「専門的知識」と「幅広い教養」、および「幅広い教養」と「友人との交際など」のあいだに$r=0.25$以上の相関

があることがわかる。「専門的知識」と「幅広い教養」とのあいだの相関は、設問(1)の結果と明らかに整合的であるが、「幅広い教養」と「友人との交際」との相関は意外な結果といえよう。なぜなら設問(1)では、学問志向因子と「友人との交際」の変数とはほとんど相関をもたなかったからである。自分の在籍する大学を「人間形成のための幅広い教養を獲得する場所」とイメージする学生は、なぜ「友人との交際やサークル活動など自由な時間を過ごす場所」ともイメージする傾向が強いのだろうか。

この理由を説明するためには、次のような予想が可能である。すなわち、被調査者である大学生は「人間形成のための幅広い教養を獲得する場所」という質問文のうちの（「教養」よりはむしろ）「人間形成」という言葉にとくに注目したのではないだろうか。そして、「人間形成」が目的であれば、そのための手段は大学での学問だけではなく、むしろ友人との交際やサークル活動におけるコミュニケーションであると考える学生が多かったのではないだろうか。

この予想を確認するために、設問(2)の変数群と設問(1)の変数群とのケンドール順位相関係数をみてみたい（各二段目のSigの数値は有意確率）。

	専門的知識	幅広い教養	就職に有利な学歴	友人との交際など
語学	.1933	.1360	.0072	.0166
	Sig .000	Sig .000	Sig .825	Sig .623
一般教養科目	.1978	.1326	-.0685	-.0044
	Sig .000	Sig .000	Sig .037	Sig .897
専門科目	.2792	.1627	.0006	.0728
	Sig .000	Sig .000	Sig .985	Sig .032
読書	.0791	.0812	-.0302	-.0921
	Sig .014	Sig .014	Sig .352	Sig .006
サークル（文化）	.0666	.0705	.0934	.1124
	Sig .040	Sig .033	Sig .004	Sig .001
友人との交際	.0541	.2022	.0689	.3260
	Sig .102	Sig .000	Sig .038	Sig .000

この表からは、いくつかの興味深い発見がみられる。

まず、設問(1)における「語学」「一般教養科目」は、設問(2)における「幅広い教養」よりも「専門的知識」の方とより強い相関をもっているという点である（前者はr=0.13程度であるのに対し、後者はr=0.2に近い）。すなわち、「語学」や「一般教養科目」に熱心に取り組んでいる学生は、自分の在籍する大学を「人間形成のための幅広い教養を獲得する場所」とイメージする以上に、「将来の仕事のために、専門的な知識を獲得する場所」とイメージする傾向が強いのである。このことは、設問(1)の分析のところで述べた予想、すなわち、大学生が、大学教育の提供する「教養」を、三つの側面のうちでは「専門に対する基礎」として最も強く意識していることを裏づけているといえよう。

次に、設問(2)における「幅広い教養」変数と最も強く相関している設問(1)の変数は、「友人との交際」である。すなわち、「友人との交際」に熱心な学生は、一般教養科目や専門科目など大学の勉強に熱心な学生以上に、自分の在籍する大学を「人間形成のための幅広い教養を獲得する場所」とイメージする傾向が強いのである（相関係数でいえば前者がr=0.13ないし0.16であるのに対し、後者はr=0.2強）。この結果はやはり、「人間形成のための幅広い教養」の獲得手段は大学での学問だけではなく、むしろ友人との交際やサークル活動であると考える学生が多かったのではないかという先の予想を裏づける。

最後に、設問(1)における「読書」変数は、設問(2)における「幅広い教養」変数とは緩い正の相関（r=0.08、5%水準で有意）、「友人との交際」変数とは緩い負の相関（r=-0.09、1%水準で有意）をもっている。この結果も、設問(1)の分析結果と整合的である。

本節冒頭で述べた「教養」の三つの側面を補助線として念頭に置きながら以上の結果をまとめると、次のようなことがいえよう。すなわち、現代の大学生の意識の上では、「教養」の(a)「専門に対する基礎」の側面と、(b)（専門以外の）「幅広い知識」としての側面および(c)文化の習得による人格の完成という意味での「人文的教養」の側面とは、互いに分離しつつあり、(a)は主として大学の「一般教養」科目に、(b)(c)は大学での学問のみならず、むしろそれ以上に友人とのコミュニケーションに帰属される傾向が強いことが指摘できる。また(c)は、読書を最も典型的手段とする文化の習得というかつての意味を失いつつあると考えられる。このことは、「人間形成のための幅広い教養」変数と「読書」変数との相関が、「友人との交際」変数や大学での学問の変数とのそれよりも弱いものであることからも指摘できる。

(3) 読書のパターン

「あなたは以下のジャンルの本をどの程度、読みますか」という設問では、以下の10項目をあげている。(a)「思想書（哲学・宗教・人生論なども含む）」、(b)「日本文学（純

文学）、(c)「外国文学（純文学）」、(d)「時代小説（歴史もの）」、(e)「推理小説・サスペンス」、(f)「ＳＦ」、(g)「ノンフィクション・ドキュメンタリー」、(h)「マンガ（マンガ雑誌も含む）」、(i)「自分の専攻分野の専門書（教科書・専門雑誌なども含む）」、(j)「趣味・実用書（スポーツなども含む）」。回答は「よく読む」「どちらかといえばよく読む」「どちらかといえばあまり読まない」「あまり読まない」の４点尺度による。

ここでも設問(1)のときと同様に、まず大学生の読書パターン全体を明らかにするために、全変数を対象とする因子分析（主成分分析）をおこなった。結果は下記の通りである（バリマックス転回後）。

まず、下表のような３つの因子が取り出された。

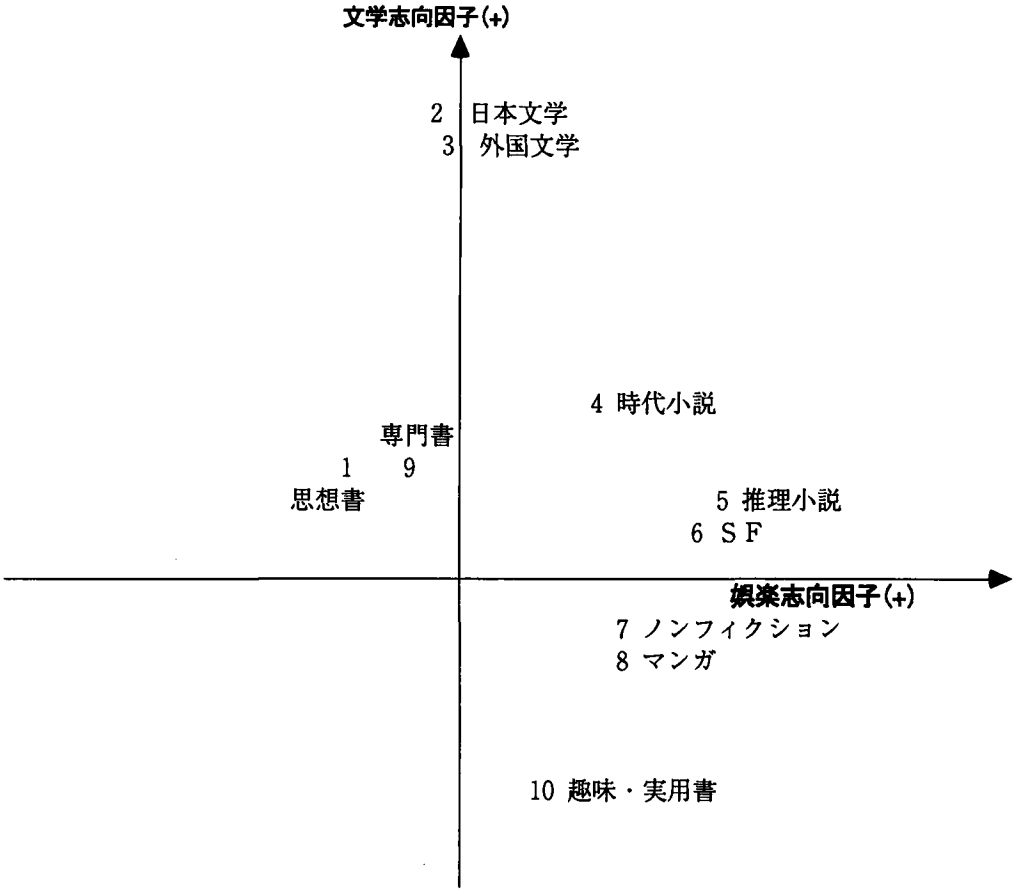
因子	固有値	寄与率	寄与率（累積）
1	2.10900	21.1%	21.1%
2	1.62234	16.2%	37.3%
3	1.24967	12.5%	49.8%

各因子と各変数との相関係数は下表の通りである（各因子との相関が強い変数の順にそれぞれソート）。

	因子1	因子2	因子3
推理小説	.73768	.13310	-.23477
ＳＦ	.69477	.09049	-.00117
マンガ	.51431	-.07934	.00669
ノンフィクション	.47113	-.03259	.38762
時代小説	.46058	.34106	.10467
日本文学	.02694	.84303	.08945
外国文学	.10274	.79881	.12466
専門書	-.03235	.18693	.69002
思想書	-.17258	.19905	.68331
趣味・実用書	.33049	-.30723	.50392

この表から、因子１を「娯楽志向因子」、因子２を「文学志向因子」、因子３を（あまり適切なネーミングではないが）「専門・思想志向因子」と命名することができよう。

各変数間の相関関係を視覚化するために、因子1を横軸、因子2を縦軸として各変数をプロットしたのが下図である。



ここでは、大学生の読書パターンを分析すること自体が目的ではないので、娯楽志向、文学志向、および専門・思想志向といったパターンが存在することを指摘するのにとどめたい。ただ、ここで一点だけ注意しておくべきは、「思想書」変数が「文学志向因子」とほとんど相関がなく、むしろ「専門書」変数との相関が強いという点である。かつての「人文的教養」においては、思想書は文学書とならんで、その中心的な獲得手段とされてきただけに、読書パターンからも、「人文的教養」の解体ないし意味喪失という現象がうかがえるのである。

しかしそれよりも重要なのは、こうした読書パターンが、設問(1)および(2)の変数群といかなる関係にあるのかという点である。この点を明らかにすることによって、現代の大

学生における「教養」と「読書」の関係という問題にも、より詳細な光を当てることができるからである。

まず設問(1)との関係については、設問(1)の各因子スコアと、設問(3)の各因子スコアとの相関をとるとうい方法をとった。下表がその結果である（数値はピアソンの積率相関係数、二段目のP= の数字は有意確率）。

	娯楽志向因子	文学志向因子	専門・思想志向因子
学問志向因子	.0800 P= .050	.3610 P= .000	.2579 P= .000
交際志向因子	.0882 P= .031	-.1633 P= .000	.0050 P= .902
文化サークル志向因子	.0792 P= .052	.0629 P= .123	.1745 P= .000

表から明らかなように、最も強い相関をしめしているのは「学問志向因子」と「文学志向因子」(r=0.36)、ついで「学問志向因子」と「専門・思想志向因子」(r=0.26)、「文化サークル志向因子」と「専門・思想志向因子」(r=0.17)である。一方、「交際志向因子」と「文学志向因子」は負の相関(r=-0.16)を示している。その他の変数間の相関は、まったく存在しないか、存在してもr=0.1未満、有意水準5%程度の緩やかなものである。

従って、設問(1)の分析の結果、すなわち読書全般への志向は「学問志向」とは正の相関関係にあり「交際志向」とは負の相関関係にあるという傾向は、「文学志向因子」すなわち文学書への読書傾向において最も尖鋭的にみられるということができる。一方、「娯楽志向因子」すなわち娯楽書への読書傾向は、設問(1)すなわち学生生活の志向パターンを示す因子とは、あまり相関をもたない。

次に、読書パターンと設問(2)との関係については、すべての相関係数を示すことはあまりに繁雑になるので、読書パターンの各因子を代表すると考えられる「思想書」「日本文学」「推理小説」および「専門書」各変数と、設問(2)で最も重要と考えられる「幅広い教養」変数との順位相関係数を示すにとどめる（数値はケンドールの順位相関係数、二段目のSig. の数値は有意確率）。

	思想書	日本文学	推理小説	専門書
幅広い教養	.0855	.0554	.0260	.0835
	Sig .010	Sig .095	Sig .428	Sig .011

表から明らかなように、「幅広い教養」変数と「思想書」および「専門書」変数との間に緩い正の相関がみられるのみである。読書に関する他の変数との相関も計算したが、いずれも有意な相関はみられなかった。この結果は、設問(2)の分析結果、すなわち「幅広い教養」変数と「読書」変数との相関が、「友人との交際」変数や大学での学問の変数とのそれよりも弱いものであること、またこのことからも、「人文的教養」概念が、読書を最も典型的手段とする文化の習得というかつての意味を失いつつあると考えられることを裏づけているといえる。

5　結論

以上の議論を要約しよう。

分析結果から示唆されるのは、次の二つの点である。まず第一に、大学教育の提供する「教養」が、「幅広い知識」あるいは「人文的教養」としてよりもむしろ「専門に対する基礎」として位置づけられているということ。そして第二に、「人間形成のための幅広い教養」は、読書や大学での勉強以上に、「友人との交際」から得られるものとして捉えられているということである。この二点をあわせて考えると、「教養」という言葉ないし概念は、現代の大学生の意識においては互いに余り関連のない二つの意味、すなわち「専門に対する基礎」と、友人との交際において得られる「人間形成のための幅広い教養」とに分裂した曖昧なものとなっているということが示唆されているといえる。その一方で伝統的な「人文的教養」は、文化の習得による人格の完成という意味を喪失している。

さて、これらの分析結果は何を意味するのであろうか。おそらく以降の議論は、さらに大規模な量的調査ならびに質的調査と分析を基にしてこそ検討されなければならないものではあろうが、ここでそのための仮説として提示しておくことも無駄ではあるまい。

これらの分析結果は、「教養」という言葉ないし概念が、高等教育の受け手である大学生にとっては、次のような二重の意味での社会化機能を意味するものとなっているということを示唆している。

まず第一に、大学生にとって「教養」とは「専門に対する基礎」という機能ゆえに獲得

されるべきもの、として捉えられていた。これはある意味でマニュアル化された答えでもある。というのは、何よりもまず新制大学においては、「教養」をこのように捉えるべきものとして位置づけ、教え込んできたからである。その結果として、分析において明らかになったように、「一般教養」科目や語学に熱心に取り組む学生は専門科目に対しても熱心に取り組む傾向にあるのである。この意味での「教養」は、「専門家」的自己理解への社会化機能を担っていると捉えられる。

第二に、「人間形成のための幅広い教養」が「友人との交際」のなかで獲得されるものとして捉えられていたということが示唆しているのは、「人間形成」という概念自体が、かつての「人文的教養」における「人格の完成」とは異質なものになっているということである。この場合、「人間形成」という目的そのものが喪失されたわけではない。むしろ、現代の大学生は「人間形成」のための手段として、従来の「人文的教養」ではなく「友人との交際」を選ぶ傾向が強いのである。彼らは「人間形成」が重要であることは知りつつも、従来の「人文的教養」がそのための手段としてはこんにちの社会においては十分に機能しないと認識しているのではないだろうか。例えば、企業入社試験の面接に関して流れる情報とは、クラブ活動において積極的に仕事を成し遂げたか、あるいはサークル活動において責任ある地位にあったか、などが重要視されるという情報である。文系学部の１・２・３回生という今回の調査対象の大学生の多くがやがて企業に勤めることになると予想されることからみても、一種の「予期的社会化」（マートン[1949/1961:240-248]）機能がはたらいていることが予想されるだろう。つまり、ここでは「人間形成」という概念そのものが（企業文化への順応、内面化という方向で）大衆化されていることがうかがわれるのである(2)。

さて、ではこのような状況下において「人文的教養」の意義は、どこに求められるのであろうか。ここで想起すべきは、一方で「人間形成」という目的自体が喪失されたわけではないこと、他方で（本稿では冒頭で指摘したのみで、分析・考察の対象とはしなかったが）教養主義的文化と大衆文化との相互浸透という現実である。後者をただ「教養主義の

---

(2)このことは京都大学の卒業生に対して行われた調査結果の一部（竹内[1994]、吉田・佐藤・筒井[1995]）からも示唆される。それらによると、読書量の多い卒業生ほど、民間企業における自己の出世には悲観的であり、また読書ジャンルにおいても、在学中に比べ就職後は教養主義的傾向が薄れる。もちろん調査対象が異なることから一般化は危険だが、これらの結果が示唆しているのは、学生時代に受容した「人文的教養」と実際の社会人文化とのあいだにギャップが存在し、社会人たる「人間形成」のためには「人文的教養」は役に立たないどころかむしろ邪魔であると認識されているということである。

危機」として嘆くのではなく、むしろそこに積極的意義を見出し、教養文化・大衆文化間のあるべき関係を模索することこそ、「教養」と「人間形成」とのあいだの新たな絆を見出すことにつながってゆくと考えられるのではないか。

すなわち、一方で教養主義的文化の内容を（視覚的メディア・映像メディアを含む）大衆文化に浸透させてゆくこと、他方では（高等教育の内容も含めた）教養主義的文化の中に大衆文化の良質のものを取り込む努力をするということである（筒井[1995:178ff]）。たとえば後者の例としては、高等教育のカリキュラムの中に、映画、音楽、マンガなど大衆文化の作品を題材とした批評を、学生間のディスカッションを通じておこなうといった方法を取り入れることが考えられよう。これは、（典型的には古典の）読書という自己の中での対話によって得られる伝統的な「人文的教養」とは異なるが、友人とリアルタイムに共有できる経験を媒介とした「人間形成」という意味で、新たな「人文的教養」の獲得を意味するものといえよう。もちろんこれはあくまで一例にすぎないが、高等教育にとっての「教養」の理念の意義という問題を考えるとき、教養文化と大衆文化との相互浸透という現実をふまえたうえで、それらを媒介とした自律的な「人間形成」への寄与をおこなうことこそ、新たな「人文的教養」の姿として積極的な意義をもつべきものであろう。これが、本稿の分析によっても示唆されるところである。

参考文献

筒井清忠 [1995]『日本型「教養」の運命――歴史社会学的考察』岩波書店
マートン,R.K. [1949/1961] 森他訳『社会理論と社会構造』みすず書房
竹内　洋 [1994]「学歴・教養資本の黄昏――京都大学卒業生調査から」『リクルート調査月報』9月号、16-19頁
吉田竜司・佐藤哲彦・筒井清輝 [1995]「読書・メディア行動とその変化」竹内洋編『卒業生からみた京都大学の教育――教育・職業・文化』広島大学大学教育研究センター、39-53頁

付記

本稿での学生生活調査のデータの整理および使用にあたっては、「学生生活研究会」代表の竹内洋・京都大学教育学部教授、および山口健二同学部助手の全面的なご協力をいただいた。両氏には、この場を借りて深く謝意を表したい。

（つつい　きよただ・教授）
（よしだ　じゅん・助手）
（みずがき　げんたろう・研修員）
（さとう　あきひこ・博士後期課程）

A quantitative study on the role and meaning of liberal education among university students

Kiyotada TSUTSUI, Jun YOSHIDA, Gentaro MIZUGAKI and Akihiko SATO

Historically liberal education and humanistic culture it offers have been tied up with Japanese higher educational system and have formed a core of elite culture. So at first they had two different characteristics: symbol of the difference from mass culture and preliminaries for advanced education. But the high economic growth in 60's and 70's resulted in prevalence of mass culture and practical mind and changed the characters of elite culture.

In this article we analyze quantitatively on consciousness of contemporary university students in two largest urban areas in Japan. We conclude that they regard liberal education as a basis for specialized education rather than for humanistic culture and that they think they achieve humanistic culture through their company with their friends. Finally we offer several suggestion of this result.

The Critical Point of Social Science

Yusuke MATSUURA

It is not the fact that "sleeping"nations has experienced their awakenings under the nationalism of modern era but , on the contrary , that nationalism has engendered nations. Ernest Gellner is one of the most popular scholars who theorized about nations and nationalism from a perspective of this formulation, and is also the distinguished social scientist who has energetically discussed the epistemological and ethical position of social sciences in the modern social context.

This article is ,as it were,"Encounters with Ernest Gellner"by reviewing his latest book, "Encounters with Nationalism". I discuss his thoughts from three different perspectives ---- theory about nationalism, vision of post nationalism era, social position of the intellectuals. These three perspectives are indispensable for understanding his whole thoughts. But I especially